

# 曲線声調と日本語韻律構造

## Tone Contours in Japanese Prosodic Structures

児玉望

Kodama Nozomi

### 本稿の構成

1. 曲線声調
2. 韻律構造
3. イントネーション句と句末イントネーション
4. 音韻句と句音調
5. アクセント句のピッチによる弁別と境界表示
6. 音節と曲線声調
7. まとめと展望

### 1. 曲線声調

児玉(2007)では、川上泰氏の「句」を、階層的な日本語音韻構造におけるアクセント句の上位の構造（音韻句）として位置づけることを提案した。本稿では引き続き、この「音韻構造の階層性」について、主として鹿児島方言と東京方言を中心に考察する。音韻構造とは、言語の能記として機能する「発話」が、分節音の単なる羅列ではなく、「音節」「音韻論上の語」「イントネーション句」といった、境界をもつまとまりを成しており、これらのまとまりが言語記号の様々な音声の実現を決定する音韻規則が適用される領域となっている、という考え方である。このうち、強勢やピッチといった超分節的特徴が関与して境界付けられる構造を韻律構造と呼ぶ。日本語の多くの方言では、さまざまな韻律構造がもっぱらピッチ変動パターンによって区切られる。熊本方言や栃木方言のようなアクセントによる弁別をもたない方言でも、ピッチ変動により何らかのレベルでの境界が表示されていることが観察できる。ピッチ変動が複数の構造の境界表示に用いられることにより、句末イントネーションと語アクセントのような異種のピッチ変動が多重に同じ音節（またはその連続）に実現することがありうる、というのが日本語諸方言の多くに共通する特徴であると考えられる。日本語アクセント研究は、このような複合的なピッチ実現から語アクセントの弁別に関わる特徴を抽出するという分析を中心に大きな成果をあげてきたが、

弁別に関わらないピッチ変動の記述については東京方言など一部を除けば必ずしも十分とはいえない現状にあると考える。本稿では、このような語の弁別に関わらないピッチ変動がどのように境界表示機能と弁別体系を実現しているかを中心に考察していく。

ピッチ変動の記述では、動的なピッチ変化に着目する曲線声調 **contour tone** と、相対的なピッチの段階に着目する静的な段階声調 **register tone** が区別される。これらの語は、音節内部のピッチ変動「音節声調」が弁別される「声調言語」の声調体系を二分し、それぞれ曲線声調を含む声調体系と各種平進声調のみが設定される声調体系との類型として記述的に用いられることのある語である。しかし、自律分節音韻論 **autosegmental phonology** 以降の音韻理論では、(段階) 声調 **register/tone** は抽象的な素性のひとつとして扱われることが多く、(動的な) 声調変化の構成成分として音節内部に実現したり、あるいは(声調) 拡散 (**tone**) **spread** として説明される現象により音節連続への(非動的な) 声調実現に関与したりといった、音節から文音調までのさまざまなレベルでのピッチ現象への関与と特徴とされている。一方で、従来の音節単位の曲線声調も、たとえば下降調の曲線声調 **contour** と高の段階 **register** から成る、というように、相対的なピッチの高低と、変化曲線そのものに分析し、**contour** という語を後者に限定した素性として用いる、といった用語法も現れている。ただし、**contour** が音節境界を越えて拡散するかどうか、言い換えれば、音節連続全体に被さることがあるかどうか、被さった場合どういう音調曲線になるかといった点についてはまだ今後本格的な議論が展開するものと考えられる(Yip 2002: 47ff)。

日本語の語アクセント研究では、かつて三段観や二段観といった段階声調的な観点からの解釈が試みられたが、現在は音節間の有意なピッチ変動(川上氏の「アクセント契機」)のみに着目し、これを引き起こす「アクセントの担い手」としての音節/拍に「アクセント核」を想定する動的音調観が主流となっている。生成音韻論ではこの核をピッチアクセントと呼び、自律分節音韻論以降は HL のような段階声調素性の組み合わせとして分析する。京阪式アクセントのように、曲線声調が型の弁別に関与する場合には、川上泰氏の「上昇性」、上野善道氏の「式音調」のように、音節境界を越えての曲線声調が、高起/低起といった段階声調との組み合わせで音韻記述に取り入れられる。しかし、音声レベルでは観察されるその他の曲線声調的なピッチ変化が、「核」あるいは早田輝洋氏の「語声調」のようなさらに抽象化された素性の音声的实现に伴うピッチ変動であるとして、個別のアクセント体系の音韻解釈の段階で捨象されることも多い。

本稿では、弁別特徴としてだけでなく、構造境界マーカースとしてのピッチ変動をも取り上げこれらを共通の枠組みで取り扱うために、音節あるいはその連続に被さる曲線声調の

分布を基礎とした韻律構造解釈を提案する。このようなアプローチが必要であることを、段階声調的な分析ではほぼ同じ解釈になる鹿児島方言と東京方言の語の単独での言い切り、つまり「音韻句」としての実現形を例に説明する。HとLで高低の段階声調を表記し、(数える単位として)鹿児島方言では音節、東京方言では拍に割り当てたものを付記する。

- (1) a. 鹿児島方言「飴」、東京方言「雨」 ともに ア]メ HL  
 b. 鹿児島方言「雨」アメ]、東京方言「飴」アメ ともに LH  
 c. 鹿児島方言、東京方言 「食べる」 ともに タベ]ル LHL  
 d. 鹿児島方言、東京方言 「イラン」 ともに イ]ラン 鹿 HL 東 HLL

母語話者としての筆者の鹿児島方言形の発音はいずれも、それぞれ対応する東京方言の音調連続とはどこか異なって聞こえる。この差は、段階声調記述では捨象されている音調曲線の違いによるのではないかと考え、川上泰氏の母語話者としての東京方言「句」の音声に関する記述をみると、句頭の特徴として、頭音節に核があり高い場合も含め、「(句の)発端は中音で、あとすぐ急激に上がる」(川上 1961)とある。早田輝洋氏も、早田(1970)で同様の観察を述べている。東京方言のデータとして手持ちの落語の音声波形を分析してみると、実際、ほとんどの発話がピッチ上昇曲線によって開始されている。これに対して、筆者の鹿児島方言の発音の分析波形ではそのような上昇調がほとんど現れない。Hの音節はすべて最初から高く、左端からの上昇幅は小さい。先行するLも音節内では下降することはあってもほとんど上昇せず、音節間の子音の部分で急激にピッチが上がる。一方、「核」に後続するL音節は、東京方言と同じく全体として下降調をとる。仮に、上昇調(音節/拍)をR、下降調をF、平調をLv、音節間上昇を[で表記すると、次のように図式化できるかもしれない。

- (2) a. 鹿児島方言「飴」 [LvF、東京方言「雨」 RF  
 b. 鹿児島方言「雨」 Lv[Lv、東京方言「飴」 RLv~RR  
 c. 「食べる」鹿児島方言 Lv[LvF、東京方言 RLvF~RRF  
 d. 「イラン」鹿児島方言 [LvF、東京方言 RFLv~RFF

もちろん、東京方言の音調形と鹿児島方言の音調形が弁別的対立をなすわけではないので、語アクセントの弁別の音韻記述としてはこのような音調曲線記述は不要である。それ

どころか、記述としてよくないとすら言える。東京方言の句音調（音韻句マーカー）には、川上泰氏によれば早上り型、遅上り型といった上昇曲線の異なる変異形がある。東京方言話者が鹿児島方言形の 2a と 2d を早上がり句音調形、2b と 2c を遅上り型句音調形として許容する、ということもじゅうぶんに予想されることだからである。しかし、鹿児島方言と東京方言の音韻句の記述として、東京方言では曲線声調のピッチ上昇、鹿児島方言ではピッチの段階上昇によってその開始を示す、という区別は本質的なものである。東京方言で早上り・遅上りといった句音調の変異が存在するのは東京方言音韻句冒頭のピッチ上昇がある程度の時間をかけて進行する曲線声調であることから直接導かれる。鹿児島方言ではこのような変異は存在せず、鹿児島方言話者は東京方言の上昇が 1 拍で終わる並上り型実現形を鹿児島方言形として許容しないというまさに今述べている事実は、このようなピッチ上昇曲線の質的な違いとして説明することもできるだろう。

一方、鹿児島方言と東京方言でともに見られる「核」に続く急な下降調は、音韻句内の位置に関わらず実現するアクセント句の特徴である。核の後に後続する音節があればこの下降調は予測可能であり、「核」や(H)L はともにこの下降調を含む諸特徴を総体として音韻論的に有意と解釈し、曲線声調そのものは捨象して示したものの、ということができる。実は、核によって引き起こされる音調変化を、(Lv や R のような) 非下降調音節 nF (の連続) から下降調音節 F への変化、というように解釈し、アクセント型を曲線声調が指定された音節の配列タイプと考えることも、原理的には可能であるし、アクセントのもつ境界表示機能を重視するならばむしろこちらのほうが都合がよい。鹿児島方言でも東京方言でも核の数はアクセント句につきそれぞれ 1 個以内であり、したがって、下降調音節のあとに下降調でない音節が現れればその前にアクセント句の境界があるか、あるいは何らかの句末イントネーションが存在する、と判定することができる。鹿児島方言でも東京方言でも、(a)曲線声調的弁別体系として実現される句末イントネーションをもっぱら担うようにみえる句末分節音配列（文末詞／終助詞）がある、(b)型の弁別のあるアクセント句に直接句末イントネーションが加わる場合、これが実現して声調が変わるのがほとんど末音節に限定される、といったことも、型の弁別のある語の場合にはアクセント句や音韻句によって曲線声調が指定済みであるから、と説明すれば理解しやすい。（これに対して、他のアクセント句と構造を構成しない間投詞の中には、アクセント型が指定されずさまざまなイントネーションで現れるものがある。）

下降調音節の出現が(A 型)アクセント句の末音節 1 個に限られる鹿児島方言では、型の弁別を「核」(HL)の位置によると考えるか、末音節の声調対立 (F/nF) によると考えるか

にあまり差がなく、後者を支持する音声事実も多い。一例をあげると、2dの「イラン」では、鹿児島方言形では長末音節ランのピッチ下降は音節全体にわたって続かなければならず、ラガンよりかなり高いのが鹿児島方言らしい発音となる。単にHからLへの段階声調変化であるとするならば、このような制約はありえない。これに対して、核のあとに続くことのできる音節がアクセント型に応じてゼロ以上任意の個数となる東京方言では、(1)下降の幅は音韻句内の最初の核の直後で最大となり、これ以降の低い位置での下降は、非下降調でも現れうる自然下降と区別がつけにくい。また、(2)末音節に核があるかないかによる弁別があるため、アクセント型を音節声調配列と置き換える場合でも「核」の指定が別個必要になる。さらに、(3)全体として非下降調音節のみから成り末音節に核がないアクセント型(平板型)は、そもそもピッチによる境界表示ができず、アクセント句境界がピッチ変動によって示されるという前提がそもそも成り立たない。ただし、(1)と(3)については、境界の有無による対立が中和されているために起きると解釈することもできる音調の交替も観察される。このような変異をすべて音韻論的に予想される変異と解釈することは、単なる自由変異と解釈すべき言語事実に必要な音韻論的解釈を持ち込むことになる恐れもあるが、韻律(アクセント)観自体は「イントネーション句、音韻句、アクセント句がその構成する音節の曲線声調を決定する」という単純なものであり、仮説として検討するにはじゅうぶんに価値があると考えられる。

## 2. 韻律構造

韻律構造は、Nespor & Vogel (1986)で提案された音韻構造の階層モデルを採用し、日本語でピッチ変動によって示されうると考えられる階層のみをとりあげる。

- (3) a. 有意味な発話(utterance)は、1個以上のイントネーション句(IP)から成る。
- b. イントネーション句は、1個以上の音韻句(p-phrase,  $\phi$ と略記)から成る。
- c. 音韻句は、1個以上のアクセント句(p-word,  $\omega$ と略記)から成る。

3から導かれるのは、有意味な発話を構成しうる最小の単位はアクセント句であり、このアクセント句は同時に単独で音韻句とイントネーション句をも成している、ということである。このようなアクセント句は、「語 word」の音韻論上の条件、つまり最小の自由形式であること、を満たしており、この古典的な意味での「音韻論上の語」である。ただし、3は発話が成立するための必要条件であり、単独で発話を構成することのできないアクセ

ント句、音韻句、イントネーション句の存在を否定するものではない。音韻句の境界特徴は、単独で発話を構成しうるすべての語に共通の音韻的特徴とその変異形である。これに対して、アクセントは、ある意味をもつ音連続が発話中でそれと同定されるための、単独で発話を構成するかどうかに関わらず一貫した特徴であり、最低限境界に関する情報をもつと考えられ、この境界で定義される領域をアクセント句と呼ぶ。イントネーションは、音韻句あるいは音韻句連続中に加わりうる変異である。

3 はまた、イントネーション句の境界("%"で表記)が存在すればそれは必ず音韻句の境界("{"で表記)であり、音韻句の境界は必ずアクセント句の境界("|"で表記)である、ということ述べる。これもまた必要条件であり、二つのイントネーション句に分割されることのない音韻句境界、二つの音韻句に分割されることのないアクセント句境界の存在を否定しない。このような音韻句境界  $\phi$ - $\phi$ 、アクセント句境界  $\omega$ - $\omega$  を例示する。

(4) a. 二句構造  $\phi$ - $\phi$  :

{お兄ちゃん}{ばっかり}、{公務}{執行}、{三十}{二才}、{猫}{大好き}

b. 二語構造  $\omega$ - $\omega$  :

降った|らしい 落ちて|しまう 日本|代表 大の|大人 彼の|ところ

発話は原則として、たとえば「句末助詞ネを挟む」というようなやり方で、アクセント句ごとにイントネーション句に分割できるが、このような分割を阻むような構造境界は、何らかの統語的条件によって選択された、派生的な（規則生成的な）音韻構造である、と考えることができる。上記の構造派生は、以下のような派生的なアクセント句統合と並行的な過程であると考えられる。 $\Sigma$  は統語論上の単位（統語論上の語または連語）、 $\pm$ pros は単独でアクセント句をなしうる、二句構造・二語構造を構成している、複合語のアクセント型を決定するといった韻律構造上の何らかの素性の有無を示す。

(5) a. アクセント句構成  $\Sigma(+\text{pros})-\Sigma(-\text{pros}) \Rightarrow \omega$  または  $\Sigma(+\text{pros})$

b. (統語的)語複合  $\Sigma(+\text{pros})-\Sigma(+\text{pros}) \Rightarrow \omega$  または  $\Sigma(+\text{pros})$

$\Sigma(-\text{pros})$  は、付属語のうちアクセント的性質が空であるようなものであり、音声的実現のために必ず他の語とアクセント句統合を構成しなければならない。これがどのような語を含むかは方言により異なる。たとえば、鹿児島方言では名詞接続の格助詞のすべてと動

詞接続の接続助詞のほとんどがこのカテゴリーに含まれ、これらが単独でアクセント句を構成することがないが、東京方言の格助詞の少なくとも一部はアクセントを持っており、助詞だけが強調される場合のようにこれらの前にアクセント句・音韻句の境界が現れるように見える場合がある。

- (6) a. {甲子園}{でも}{ヒットを打ちました} 鹿児島方言では不可能  
 b. {甲子園でも}{ヒットを打ちました}

5b は、語彙的な複合語形成とはレベルの異なる派生構造として仮定されるものであるが、具体的にどんな複合語がこのカテゴリー、つまり派生的なアクセント句と認められるかは個々の事例ごとに検討が必要である。必要条件として、鹿児島方言や東京方言のような型の弁別をもつ言語では、派生するアクセント句の型の決定が規則的に行われることが求められる。鹿児島方言の場合、平山輝男氏が一般複合語規則と命名した、前部要素の型が全体に適用される、5a と共通の型決定手続きがあり、これに従うことが条件となろう。東京方言の場合、後部要素がアクセントを決定し、前部要素がアクセント核を失う複合語派生が多いが、このタイプでは前部要素に無核アクセント句をもつ二語構造と韻律の点では（各語の型所属を無視すれば）区別がつかない。5a/b と二語構造は、機能面で競合関係にあると見られ、東京方言で二語構造をとるものが鹿児島方言では1アクセント句として現れる場合や、同一方言でもどちらの形をとるかで揺れる場合が観察される。

- (7) a. やったり|とったり                      cf. ふんだりけ]ったり  
 b. ヤッタイトッ]タイ                      (鹿児島方言では可)
- (8) a. {イマ}{テレビミカ]タ}                      「今テレビをみている」(鹿児島方言)  
 b. {イマ}{テレ]ビ]ミカタ}                      「今テレビをみている」  
 c. {イマ}{テレビ]オ]ミカタ}                      「今テレビをみている」

鹿児島方言で東京方言と比べて語複合(アクセント句統合)が現れやすい理由としては、単一で規則的な語複合の規則が生産性を維持していることが挙げられるだろう。しかし、いかに生産的であっても、この語複合過程がたとえば疑問詞句全体、文全体というような統語論上の句に適用されるということは、鹿児島方言では起こらない。原則として、語複合規則は、統語的に枝分かれしない特定の二項関係にのみ適用される局所的な規則であり、

その出力もまた句範疇ではなく語彙的な範疇（「連語」と呼ぶ）になると考えられる。三項以上に及ぶ場合も、二項関係からの出力を入力とする派生が繰り返し適用されたと解釈できる。その意味で、5a-b の派生は 4a-b の構造派生と並行的である。4a-b の出力である二句構造や二語構造がさらに 5a-b の入力となったと解釈できる構造が存在することも、これらの派生の並行性を示唆するといえる。

- |                          |                |
|--------------------------|----------------|
| (9) a. カササシテ]            | 「傘を差して」(鹿児島方言) |
| b. カササシタトコイ]             | 「傘をさしたところ」     |
| c. *カササシタ]               | (終止形は複合不可)     |
| d. ジャノメノ]]カサオ]]サシテ       | 「蛇の目の傘を差して」    |
| (10) a. {アジア}{アフリカ諸国 訪問} | 4a→5b→4b       |
| b. {公務}{執行妨害}            | 4a→5b          |
| c. {降られて}{ばかり いた}        | 4a→4b→5a       |

10a-c のような「括弧付けの逆説 bracketing paradox」は、4a-b、5a-b の派生過程が局所的な二項関係のみに条件付けられていることをよく示している。境界決定に関与すると考えられるもうひとつの局所的な過程は、プロミネンス付与に関わるものである。児玉(2007)で論じたように、日本語には音韻句単位でのプロミネンス付与、言い換えれば、音韻句連続の中で一つだけを取り出して際立たせる仕組みがあり、これが対比強調などの機能を担うと見ることができる。対比強調できるのは、1音韻句、つまり1個以上のアクセント句に限られるわけである。従って、対比強調する部分が句全体であればこの内部に音韻句境界が存在してはならないし、統語論上の句の一部分のみであれば、アクセント句単位で取り出してここに音韻句境界を置かねばならない。このため、二句構造が解消されて一句にまとめられたり、逆に二語構造の内部に音韻句境界が加えられたりする。東京方言の 6a はこの後者による二語構造の分割であると考えられる。句末イントネーションとして分析しないのは、音韻句境界が後続せずイントネーション句境界の置けない位置でもこのような強調が起きるからである。句末イントネーション（たとえば高くピッチを維持して終わる RLv%）は音韻句へのプロミネンス付与に付随してこの音韻句末にしばしば現れるが、プロミネンス付与そのものとは区別されるべきである。

- (11) a. (欧米諸国ではなく) {アジア|アフリカ諸国}RLv%{訪問}



- b. (アジアとヨーロッパではなく) {アジア}{アフリカ諸国}RLv%{訪問}
- c. \*{アジア}{アフリカ}RLv%{諸国}{訪問}

(12) a. {甲子園}{でも|打ちました}

- b. {甲子園|でも|打ちました} (12a の前提となるアクセント句分割)

12a と 12b で興味深いのは、「甲子園」の末子音の実現である。12b では音韻句内で後続する子音[d]に同化し、[n]でなければならないが、音韻句末となる 12a ではこの同化による歯茎閉鎖の形成が 12b より遅く、音節（音韻句）内で同化が起きていない印象を与える。このような分節音実現形を決める領域としても音韻句が機能していることがわかる。

プロミネンス付与が 1 個の音韻句を際立たせるのに対して、2 個以上の句が並列されることを示すためにこれらが等しく音韻句を構成するように境界が設定される場合も、句レベルでの局所的な韻律構造である。プロミネンス音韻句の場合と同様、内部の二句構造が解消されることがある。4a のような語レベルの二句構造との違いは、並列が音韻句境界だけでなくイントネーション句境界を加えて示されうることである。なお、「並列」とは何か、たとえば主題と陳述のような二項関係は並列と見なしうるかどうか、構文論上どんな条件を設定すべきかといった問題には本稿では立ち入らない。13b のような、内部の二句構造が解消されている構造が並列句構造であるとすれば、13a も同様に並列句構造とみなしうる、というように、句レベルでの（統語構造上枝分かれ可能な）並列にも音韻句境界が用いられるということを指摘しておく。

(13) a. {繁華街の}{路上で}{その日暮らしの|男性}

- b. {熊本市|新南部の}{木造|2階建て|築|三十|五年の|アパートで}{一人暮らしの|男性}

このほかに、句レベルでの韻律構造として、疑問詞句音調のような、統語レベルでの句全体にほぼ対応するような音韻句も存在する。ただし、このような構造は、局所的な関係を表示する二句構造・並列句構造やプロミネンス付与によってしばしば分断される。一般的に言って、音韻構造では局所的な関係が全体より優先されると考えてよいかもしれない。統語構造が本来一次的ではない内容を部分が全体を完成するように組み立てて一次元配置する全体完成型の構造であるのに対し、音韻階層構造は上位に行くほど構造条件が希薄になる。音の配列の各部分が、発話、つまり「文の一部以上」をなすと認められるための条件を規定するという機能から、このような局所関係優先の原則があるのだと考え

る。語彙範疇同士、句範疇同士、語彙範疇と句範疇といった統語的にかなり内容の異なる諸関係が音韻句という同じ道具立てで表されるのは、言語記号の線状性による制約であり、同じ音素が異なる語彙を構成するのと質的には違いがない。

音韻句への統合は、内部のアクセント句境界を削除して全体を1アクセント句とすることによっても実現する。アクセント句境界を削除して生じたアクセント句にどんな型を指定するかの一般的原則がない東京方言では適用できない手続きであり、そのような原則がある鹿児島方言でも限定的にしか見られない<sup>1)</sup>。しかし、型弁別単位としてのアクセント句をもたない一型アクセント言語では内部に韻律的境界をもたない句レベルの音韻句がしばしば観察される。このことは、究極的には（韻律的手段で）音韻句とアクセント句の階層を区別しない言語が存在しうるか、という問題につながっていくものである<sup>2)</sup>が、現段階で、音韻句とアクセント句の機能分担が必ずしも固定したものではないことを示唆するといえる。アクセント句の境界が必ずしも韻律的に明示されない東京方言で、アクセント句と音韻句（アクセント句連続）の対立が中和する場合があることも、このように説明されると考える。

### 3. イントネーション句と句末イントネーション

発話が二つ以上の IP に分解される場合、その境界に現れるのが境界音調としての句末（あるいは句頭／句）イントネーションである。したがって、単一のイントネーション句から成る発話では境界音調が無標であることもありうる。この点で句末イントネーションは句音調やアクセント句の境界表示とは異なる。しかし、イントネーションで区切られた発話がどのようなコミュニケーション機能をもつかに応じた弁別の音韻表示がこの境界音調と共通の手段で表されることは経済的なことであり、境界とかかわりなく単一イントネーション句にも現れる音韻特徴を文末（あるいは文頭／文）イントネーションと呼ぶ。

日本語に曲線声調による句末や文末のイントネーションが存在することは言を俟たないが、これらが有限個の要素から成る体系をなすこと、これらがみな等しくイントネーション句の境界声調と認められ、声調自体に意味があるのではなくイントネーション句を構成する音韻句・アクセント句や助詞との組み合わせに応じて意味が決定されること、したがって、句末・文末のイントネーションを区別する必然性はないことを論じていく。イントネーション句の最後の音節に現れる曲線声調のうち、R（上昇）、F（下降）、Lv（平進）といった成分2個以内の組み合わせから成るものだけを取り上げる。

(14) 鹿児島方言・人名

- a. ヒロコ]-RF%                   語りかけ、問いかけ
- b. ヒロコ]-R%/RLv%           呼びかけ、例示的問いかけ
- c. カツ]オ-F%                   語りかけ、問いかけ
- d. カツ]オ-FR%/FLv%          呼びかけ、例示的問いかけ

鹿児島方言の1アクセント句から成るイントネーション句の例として、人名にイントネーションが加わったものを取りあげて最終音節の音調を-X%で示す。B型アクセント句ではRにはじまる声調、A型アクセント句ではFにはじまる声調のみが現れる。この最初の声調成分はアクセント句としての型の弁別と、B型では音韻句境界特徴としての句音調に関わる声調区別であり、イントネーションの弁別にはイントネーション句最終音節の終端部(=X%と表記)のみが関与し、型の弁別には影響しないと言えそうである。終端部ではそれぞれFか(=F%)、Fでないか(=nF%)の二項対立であると考えられる。=Lv%に聞こえる終端もあるが、意味の点で=R%が出る場合とはっきりした区別がないし、また、Rの有無による音声的実現に不連続は見出し難い。なお、例示的問いかけとは、問い返しを含まない自発的な問いかけをいう。語りかけ、呼びかけの意味は呼称として使える名詞に限って現れるが、問いかけ、つまり疑問文形成についてはほぼすべてのアクセント句に加わることが可能で、また、この二つの曲調が文末以外の句末の休止にも現れる。

声調の加わる単位はアクセントと同じく音節であり、句末音節が短音節・軽長音節<sup>3)</sup>の場合とB型重(2モーラ)長音節ではいずれもこれらのイントネーションが音節全体に加わる。「トロンボーン」のようなA型アクセント句末の長重長音節は、句音調と句末イントネーションが加わると母音内部で2モーラに区切られ、1モーラ目が句音調のみを担い、2モーラ目がA型イントネーション声調に置き換わる(例: トロン[ボ]オン-FR%~F%「トロンボーン?」)。このような分割があることや狭母音の無声化とそれに伴う音節再編が起きないことを除くと、A型の=F%形は、音声的にはイントネーションの加わらない無標形とほとんど区別がない。呼称として使える名詞の句末軽長音節がさらに延長される場合には、句音調と=F%から成る特殊な呼びかけイントネーションがこの長軽長音節に現れ、型の区別が失われる。

(15) 鹿児島方言・人名

- a. コダマ[サーン-RF% (<RF=F%)   cf. コダ[マ]サン-F%

- b. ヤマダ[サーン-RF% (<R=F%)      cf. ヤマダ[サン]-RF%
- c. \*コダマ[サーン-R%                      cf. コダ[マ]サ (一) ン-FLv% (<F=nF%)
- d. ヤマダ[サーン-R%                      cf. ヤマダ[サン]-R%

上記の4種のイントネーションは、終助詞で終わるイントネーション句でも共通して現れる。ただし、これらの終助詞では、通常のアクセント句末のような型の区別に応じた相補分布は観察されず、むしろイントネーションとの組み合わせに応じて異なる機能をもつように見える。終助詞の場合も、=R%~=Lv%の音声的な違いは機能区分には影響しない。

#### (16) 鹿児島方言・終助詞

- RF%              ヨ、ネ（共感）、ケ
- R%/RLv%      ヨ、ネ（詰問）、ケ、ガ（勧誘）、ド（促し）
- FR%/FLv%      ヨ、ネ（質問）、ケ、ガ（同意推量・勧誘）、ド（伝達）
- F%              ヨ、ネ（質問）、ケ、ガ（推量・反駁）、ド（発見・伝達）、サ（伝達）

もっとも基本的なのは F%だと見られ、表のサ以外にも質問のナ、やや句中止のワイなどほとんどこのイントネーションでのみ現れる助詞が他にある。二つ以上の助詞が連続する場合は、先行成分は-F%の音調をとり、最後の助詞がそれぞれ決まった声調で現れる。よく見ると、-F%で聞き手の存在を前提としない独白的用法をもつものが R=/R を加えて聞き手への語りかけを明示するようにも見えるが、通常の子型弁別体系とはまったく異なる原理で出現していることは間違いない<sup>4)</sup>。鹿児島方言ではこれらの終助詞は「独立する付属語」であり、先行のアクセント句との間に境界があることは明らかであるが、音韻句内で観察される先行撥音の同化もまた引き起こさないことから、鹿児島方言の終助詞は、特殊なアクセント句から成る、句音調に関しても特殊な、イントネーション句末にのみ現れる単独の音韻句として韻律階層に位置づける分析が妥当であろうと考える。

これらの終助詞の前には他の句末イントネーションが現れることがないので、この境界が二句構造を成すということもできる。この二句構造では、音韻句自体に句音調が加えるイントネーション機能（コミュニケーション機能）との相関が観察される場合がある。たとえば、名詞句音韻句（準体助詞トの句を含む）と終助詞音韻句{ヨ-F%}、{ケ-F%}が構成する焦点構造がそのひとつである。これらの助詞は、（東京方言の「ダ」ヨ-F%」「ダッ」ケ-F%」にほぼ相当し）疑問詞疑問文やその回答文（ヨ）、焦点疑問文（ケ）に用いられ、先行音韻

句はプロミネンス付加された句音調で現れる。このような積極的な機能付けがない場合には、終助詞音韻句は共通して、先行音韻句の曲線声調の実現に句末イントネーションが関与する（被さる）ことを阻んでいると考えられる。

東京方言の句末イントネーションは、X-JToBI など弁別体系としての分析も多いが、本稿では段階声調 H,L ではなく曲線声調を単位としての分析を試みる。単独のアクセント句に加わる曲線声調の種類は7種類に及ぶが、それぞれ出現条件がある。まず、前分に R を持たない4つは鹿児島方言同様にアクセント句の型によって条件付けられており、それぞれ Lv におわるアクセント句（無核・尾高）と F に終わるアクセント句（頭高・中高）の末音節終端部に加わる声調であると考えられる。東京方言でも F%は無標の場合と音形がよく似ているが、ヒ]ロシ-F%のように、末音節の母音が無声化しない点で区別される。R で始まる3つの声調は型の区別なく音節全体に加わるが、列挙や句中止の場合の-RF%以外では句音調による句頭音節の上昇幅が小さいことを条件としており、句音調の実現形と句末イントネーションの組み合わせが句末音節上で実現していることが窺われる。

#### (17) 東京方言・人名

- |    |                       |             |
|----|-----------------------|-------------|
| a. | ヒ]ロコ/カツオ-RF%          | 列挙          |
| b. | ([]ヒ]ロコ/カツオ-RF%       | 語りかけ、絶句     |
| c. | ([]ヒ]ロコ/カツオ-R%        | 呼びかけ、問いかけ   |
| d. | (変な) ([]ヒ]ロコ/カツオ-RLv% | 断定（「しみじみ調」） |
| e. | ヒ]ロコ-F%               | 語りかけ、絶句     |
| f. | カツオ-LvF%              | 語りかけ、絶句     |
| g. | ヒ]ロコ-FR%              | 呼びかけ、問いかけ   |
| h. | カツオ-LvR%              | 呼びかけ、問いかけ   |

句末イントネーションを担うのは、列挙の-RF%の場合は拍であるが、それ以外では2音節以上から成るアクセント句の長末音節では音節全体に加わることがある。川上秦(1963)で第二種の上昇調と呼ばれているもののうち形態素境界を含まないものはこれに相当すると考えられ、長音節内に核がある場合でも、恰も音節全体が Lv の音調であるような（無核のオジサンと同様な）句末イントネーションが選択される。

#### (18) 東京方言「先生」

- a. センセ]エ-RF% 列挙
- b. ([)センセー-RF% 語りかけ、絶句
- c. ([)センセー-R% 呼びかけ、問いかけ
- d. (変な) ([)センセー-RLv%, ([)センセ]エ-RLv% 断定 (「しみじみ調」)
- e. センセー-LvF% 語りかけ、絶句 cf. オジサン-LvF%
- f. センセー-LvR% センセ]エ-FR% 呼びかけ、問いかけ

1 音節アクセント句の場合には、句音調による R が必ず被さってくるために音節前分での対立がなくなり後分のみで 3 種の曲線が区別される。ただし、列挙と絶句の二つの下降調は下降幅（あるいは音節の長さ）の点で区別があると考えられ、アクセント句末音節の内部に加わるイントネーションとしての曲調は、東京方言では =RF%, =F%, =R%, =Lv% の 4 種ではないかと分析する。

#### (19) 東京方言「目」

- a. [メ-RF%列挙 cf. ネコノ|メ-(LvR)F%
- b. [メ-RF%絶句 cf. ネコノ|メ-LvF%
- c. [メ-R% 問いかけ、問い返し cf. ネコノ|メ-LvR%
- d. (変な) メ-RLv% 断定 (=無標形)

東京方言でもさまざまな曲線声調イントネーションとの組み合わせによる終助詞の機能分化が観察されるが、鹿児島方言と大きく違うのは、先行するアクセント句のアクセント型に条件付けられた相補分布が観察されることである。まず、20 には明示しなかったが、「花」に後続する場合のように直前に核がある場合は、RX%では、この位置の音韻句同様に、冒頭に「音調の谷」を形成するような短い下降をもつことが多い。さらに、17e-h に対応すると見られる前分に R が出ない場合の 4 種は、先行するアクセント句に核があるかないかを条件とする異音と見なせそうである。用言型アクセント句では、早田(1990)がアクセント挿入規則として一般化する、無核アクセント句末への核の挿入がある<sup>5)</sup> ため、用言接続のみの助詞では交替形がないものが多いが、ヨ、ゾ、ネと名詞に接続できるサ、カについては交替があり、先行アクセント句のアクセント核の有無による相補分布が観察される。これらのアクセント句と統合しているとすれば、F/nF が予想される位置での相補分布となる。

(20) 東京方言・終助詞

RF%	ヨ、ネ、カ（独白可）、サ（句末）
R%	ヨ、ネ、カ（問い詰め）、ゾ、サ（句末）
RLv%	ヨ、ネ、カ（独白）、ゾ、サ、ワ（女性）

（有核）「ある」「雨」「花」（無核用言）「いる」の後で

F%~]LvF% ヨ、カ（独白可）、ゾ、サ、ワ（~ヤ/イ\_\_）

FR%~]LvR% ヨ、ネ、カ、ゾ、サ、ワ（女性）

（無核）「鼻」「いる」の後で

LvF% ヨ、カ（独白可）<体言のみ>、サ<体言のみ>

LvR% ヨ、ネ、ゾ、カ<体言のみ>

この相補分布の条件は、一般にアクセント句にイントネーションが加わるときと同じであり、これらの助詞が先行するアクセント句に統合されていてその末音節になっている、という解釈を許す。もしもこれらがアクセント句の一部であるとする、17-18と同様に、句音調交替形との融合形として前分にRをもつイントネーションが存在することも予想され、実際、RLv%の諸形は「しみじみ調」のような句音調のRが音韻句末に現れる形に出現しやすい。撥音の同化を使つての音韻句境界のテスト（~マセン\_など）でも、Rに始まらない諸形とRLv%では同化した形で現れ、先行アクセント句に統合されているという解釈を支持する。しかし、すべてのRX%がアクセント句としての独立性をもたない、というわけではないのは、たとえば対応する=F%がなく、これと句音調との融合という解釈ができないネ-RF%の例からもわかる。この形のネは撥音の同化を阻むようであり、音韻句（かつアクセント句）として独立していると考えねばならない。句音調としてのRは東京方言に一般に現れるものではあるが、むしろ、単独でイントネーション句を構成する間投詞と共に、主としてイントネーションを担う特殊な音韻句を設定すべきであろうと考える。他に20で面白いのは、=F%のイントネーションで現れる終助詞が、すべて対応するRF%をもつわけではない、という点である。これらの助詞と、「しみじみ調」とが実現するコミュニケーション機能の間になんらかの両立不可能な点があるものと考えなければならぬ。

以上、鹿児島方言と東京方言の句末イントネーションを曲線声調の分布という観点で比べた。共にイントネーション句の末音節のみの曲線声調で境界と意味の弁別を表示している、という点では共通の両方言であるが、アクセント句の曲線声調弁別の維持という点ではかなり異なっている。鹿児島方言ではイントネーションを担う終助詞が音韻句として独

立しており、先行のアクセント句は句末イントネーションの影響を受けない。終助詞がなく直接句末イントネーションが加わる場合でも、末音節の後半部のみに影響し、型の違いによる曲線声調の対立はほぼ維持される。なお、疑問文などを終助詞を伴わずにイントネーションのみで表現する話し方は、鹿児島方言ではおそらく戦後生まれの世代から下で広まったものであり、本来はイントネーション曲線声調がアクセント句に直接被さることは呼びかけや問い返しのように限られた用法でしかなかったのではないかと考えられる。これに対して、東京方言では終助詞に終わるものを含め、句末イントネーションによる曲線声調が直接的にアクセント句の実現に影響する。無標形でのアクセント型による句末音節の曲線声調の違いを中和する RF%や RLv%のようなイントネーションもある。また、音韻句の曲線声調が句末イントネーションと共起して(弁別アクセントに対する)「イントネーション」とでも呼ぶべき曲線声調の複合体を形成しており、アクセント弁別にとっては曲線声調がさして重要にならないことを感じさせる。

さらに、弁別的アクセントをもたない韻律体系では、イントネーションの現れ方はもっと異なることが予想されるが、典型的にイントネーションの加わりやすい終助詞のような要素をもっている言語でこれらがどういう位置づけになるかを比較するためにも「韻律構造」の分析が重要であると思われる。

#### 4. 音韻句と句音調

鹿児島方言と東京方言では音韻句はともにピッチ上昇によって区切られる階層である。その意味で、児玉(2007)では「音調句」という語を用い、ピッチ上昇を「句音調」と呼んだ。このピッチ上昇は、どのアクセント句単独の発話でも必ず現れており、アクセント型の弁別にとっては冗長と考えられる部分である。アクセント句の型の弁別がその場に現れていない他の型と範列的体系を成すのに対し、共起して連辞関係に立つアクセント句の間に存在する何らかの関係を表示するには、このような非弁別的な共通の特徴により、一次的な要素配列から関係表示される要素が同定されなければならない。単独の発話で必ず現れるこのような共通特徴がアクセント句連続内で認識されるかされないかは二値的な対立を成すとし、この考え方の帰結として、音韻句境界素性を持たないアクセント句境界により統合された音韻句という階層が立てられるのであるが、これはいわば「句を語のように機能させたものが音韻句」とする考え方である。

このように共通特徴を共有して関係表示された「語のようなもの」の連続の中でさらにひとつを取り立てるプロミネンス付与は、この共通特徴の音声的実現に関わる要素におい



ての際立ちとして定義され、このことから、プロミネンス付与の単位という音韻句の機能が導かれる。プロミネンス付与が、ある領域（イントネーション句？）において定義される±プロミネンスのような、やはり二値的な素性として各音韻句に割り当てられるかどうかにはさらに検討の必要があるが、「句音調」の音声的実現の変異の記述としては、少なくともプロミネンス付与に関わるような特徴が説明されなければならない。

また、音韻句内部に目を移すと、児玉(2007)で述べたような拍の等時性や、2章と3章で触れた撥音の同化のように、音節や分節音がどのように実現するかの規則性の多くが音韻句をその領域とすると考えられる。ただし、母音の無声化のように、東京方言と鹿児島方言で明らかに分布が異なるものもあり、どんな実現規則が音韻句を領域として定義されるかは方言ごとに記述する必要がある。

(21) a. {早く}{来なさい}

b. {もっと}{早く|来なさい}

c. {もっと|早く|来なさい}

無声子音間を無声化の条件とする東京方言の規則では、21aの音韻句末音節「く」の無声化は任意となり必ず無声化する21b-cとの違いが出るが、B型アクセント句末母音の無声化が句音調実現のための先行音節との音節再編を必要条件とする鹿児島方言では、21a-bで任意の音節再編が起きない限り無声化がないのに対し、無声化が義務的な21cと対比される。その他、環境に応じた音声実現が予想される現象についてはすべて、その領域を吟味する必要があると考えられるが、本稿では曲線声調の実現に関わると考えられる現象のみに限定して述べる。

まず、鹿児島方言の句音調の実現について記述するが、音節単位の段階声調を基本とする体系についての本論に入る前に、鹿児島方言で特徴的な音節について簡単にまとめておく。

#### A. 無声音節

狭母音の無声化は、鹿児島方言では主としてアクセント句を領域とする。つまり、多音節アクセント句末の母音の無声化は後続アクセント句の頭音と関わりなく起きうるのに対し、単音節アクセント句の無声化は後続アクセント句の頭音が有声のとき阻まれる。句音調を伴う多音節B型アクセント句末では先行の母音と音節が再編されることが無声化の必要条件である。型に関わりなく動詞活用形・マスなど無声化と音節再編が形態論上指定さ

れる場合がある。その他の位置では音節再編を伴わない無声化が可能で、この場合に無声音節として韻律論上の単位を構成する。単音節アクセント句では、この無声音節がアクセント句を構成することがある。

例： フタツキ フ-[タツ]-キ～フ-タ-[ツ]-キ 「二月」「蓋付き」  
キ|チョッタ 「来ていた」

## B. 軽音節／重音節

鹿児島方言では、過去に長音節と短音節の弁別が失われかけた時期あるいは地域があったと見られ、ソツ「焼酎」、ソイ「醤油」、タケ「高い」、イズロ「石灯籠（地名）」など長母音や二重母音の縮約によって生じたと考えられる方言語形が多数現存している。現在では漢語など共通語からの移入形を中心にこの弁別は回復しているが、長音節は短音節2個分よりかなり短く実現し、韻律上も短音節と同様に扱え、2モーラに分割されない軽音節である。これに対し、子音脱落によって発生したと考えられる長音節の中は、句音調を伴う場合に安定して長いものがある。外来語を中心に分布する（長母音と音節末子音から成る）長長音節と併せ、2モーラに分割されて各モーラが異なる曲線声調を担う音節という意味で重音節と呼ぶ。（上野(1992)参照）重音節と軽音節の区別は、主として句音調の実現のしかたに関与し、句音調が加わらない音韻句の2番目以降のアクセント句では対立が中和される。

例： サア<サマ「様」 セエ<\*サマニ 「(名詞)の方へ」「(連用)ーて」  
(ケン) カギイ<\*カギリニ 「(死ぬ)ほど」 トーイ<\*トラリ 「(連体)通り」  
アア-{ヨ/イ-F%} < (終止) -ワ-ヨ 「(終止)ーわい」

冒頭で述べたように、鹿児島方言の句音調は段階声調として音韻句頭のアクセント句内で実現する。具体的には「アクセント句末のピッチ下降開始位置の直前に、1音節以内の高平調(H)または上昇調の曲線声調を実現する段階声調」とまとめられるだろう。句末ピッチ下降がFの曲線声調で実現するA型アクセント句では音節構成に応じてL[H]/Hの二つのいずれか、句末ピッチ下降が音節間段階声調のB型アクセント句ではL[H]が現れる。L[H]/Hの違いは、前章で述べた焦点構造などに現れるプロミネンス付与形で観察できる。L[H]では主としてLのピッチが下降することによってプロミネンスが実現しうるが、先行するLを置くべき音節を欠く場合に現れる[H]は、左端の高くはじまる上昇調の曲線声調の傾斜を上げ、ピークHのピッチを上げなければならない。

アクセント句の句末音節が軽音節で2音節以上から成るアクセント句では、[H]が高平調音節として実現する。終わりの2音節がA型で[LvF]、B型でLv[Lv]の連続となる。2音節

より長い A 型アクセント句では、次末音節が低平調をとって句音調が L[H を実現する。2 音節の A 型アクセント句もプロミネンス形の句音調として L[H 型を取ることがありうる（例：{ハ]ナ}{ヨ-F%}「鼻だよ！」のハの長い R）。つまり、プロミネンス実現のために、頭音節内部で低めのピッチから開始する上昇調が現れることもある。しかし、この場合でもピッチ上昇の終点 H はかなり高い。次末音節では A 型の高平調・B 型の低平調とも、音節の長短が関与しない。また、A 型では音声的に H を担えない無声音節がこの高平調音節の位置を占めることがあるが、この場合は末音節の F の下降開始ピッチとして H が実現する<sup>6)</sup>。

A 型で[H と F、B 型で L と[H が音節内に共存しなければならない単音節アクセント句と、共存することができる重音節を末音節にもつアクセント句では、H が音節内部の Lv または R の曲線声調として実現する。

A 型単音節・重末音節では[H が音節冒頭で短い高平なピッチを保ってから下降する。このため、短単音節でもやや長くなる。プロミネンスが付与されると、この冒頭部が急な上昇曲線となってその後一気に下降する。さらにこの音節末に句末イントネーション=nF% や=F% が加わると、長音節では句音調[H の高平部が前半 1 モーラの上昇調として、A 型下降調と句末イントネーションの複合が 2 モーラ目で、それぞれ実現する。A 型短単音節ではモーラ分割は起きないと考えるが、句末イントネーション=nF% が現れる場合は全体として[LvFnF という複雑な曲線を 1 音節で実現するため、FR% よりも FLv% の形で現れやすく、この (LvFLv) が、音節内部で段階声調 (Lv]Lv) が実現しているように聞こえる。たとえば[H-セン-FLv% 「しない？」が se]en のように 2 モーラ的に実現する。下降調イントネーション=F% が加わる時は、無標の場合よりやや長めに発音されるものの、曲線声調自体はほぼ同じ[LvF~[RF である。

B 型短単音節では、L[H が冒頭部のごく短い上昇曲線  $\Delta$  ( $\Delta$ R の意味で用いる) として実現し、全体としては  $\Delta$ Lv となる。[H の実現ピッチは A 型冒頭の[H と比べるとかなり低い。プロミネンスが付与されると、この上昇部が全体として伸び、ピッチ変動の範囲も上下に広がる。ただし、上昇曲線は Lv を実現するために終わりに向かって緩やかになり、上昇調イントネーション=R% が加わった場合の音節全体としての R とは区別される。

B 型重末音節では、L[H は音節上昇調 R として実現する。重長音節（例：ミッセエ「見て」）では丁寧な発音やプロミネンスが付与された場合には最初の 1 モーラで Lv な曲線を維持し後半だけが上昇する段階声調的な発音も見られるが、この場合でも後モーラは全体として上昇を維持する。長重長音節（例：戦闘シーン）でこのような低平部を置くと、音

節が母音内部で2モーラに分解されてモーラ間上昇が現れ、2モーラ目もLvで実現する。プロミネンス付与は、上昇の開始ピッチ(L)を先行部分とともに低め上昇の終わりのピッチ(H)を上げることによって実現する。句末イントネーションは上述のようにこの末音節全体に加わり、モーラ分割は解消する。つまり、全体として上昇の開始が早まり、先行の音節があれば音節間上昇も発生する<sup>7)</sup>。(例：セントー[シーン-R%~RF% 「戦闘シーン? / 銭湯シーン?」])

無声音節から構成されるアクセント句が音韻句先頭に現れる場合、句音調[Hは2音節目の開始ピッチの上昇として実現する。しかし、音節内部の曲線声調による差は知覚できず、型の違いによるHの値の差が存在するとしても知覚可能かどうか疑わしく、おそらく型の弁別は完全に失われていると考えられる。(例：フツ|チョッ(F) 「振っている(A型)」 フツ|チョッ(F) 「降っている(B型)」)

## (22) 鹿児島方言句音調

[H： 1音節または2音節軽末音節のA型

L[H： 2音節以上のA型およびすべてのB型

[H： 高平調音節として実現

- ・ A型 (L\$)[H\$F\$
- ・ B型 (L\$)[H\$ (\$は音節境界)

[H： 音節内Lv/Rとして実現

- ・ (L\$)[LvF： A型単音節(~[RF%/[RFR%])と重末音節(~[R]-F%/[R]-FR%)
- ・  $\Delta$ Lv： B型単音節(~[RF%/[R%]) (、A型2音節軽末音節の次末音節)
- ・ Lv-R~R： B型重末音節(~[RF%/[R%])

[H： 後続音節冒頭に実現

- ・ A型次末無声音節 アクセント句末音節冒頭
- ・ A型/B型無声(単音節) アクセント句 次アクセント句頭音節冒頭

以上、簡単にまとめると、鹿児島方言の句音調は、音韻句頭アクセント句末尾のA型下降調F、句末音節末イントネーション(F%, R%)があればこれに先行し、L[があればこれに続く音節頭からのLv(プロミネンス付与でR)を1音節以内の長さで実現するHであるが、アクセント末音節での曲線声調F, Lvの実現に1軽長音節(1モーラ)以下という長さの

制限があるため、位置や曲線声調の実現形に変異形がある、といえそうである。末音節での曲線声調の長さの制限が音声実現レベルでの制約であることは、強調的な末音節の延伸で出現する派生的な長軽長音節でも（各モーラが韻律的に分解されない場合の）重音節と同様なピッチが観察されることから窺われる。23b はもっと強調すると[に替わって音節冒頭に R が出現し((LvF)>(RF))、F 自体の長さは延長しない。

- |                |          |         |
|----------------|----------|---------|
| (23) a. [シ]ラン  | [LvF     | 「知らない」  |
| b. シ[ラーン]      | Lv[(LvF) | 「知らな—い」 |
| (24) a. ワカ[ラン] | LvLv[Lv  | 「わかんない」 |
| b. ワカ[ラーン]     | LvLvR    | 「わかん—い」 |

[H に先行する L は、先行の音節連続全体に曲線声調 Lv+ を付与すると考えられるが、これにはあるいは個人差や地域差があるかもしれない。三遊亭歌之介師の鹿児島方言落語でも聞かれるが、特にプロミネンス付与に際してこの音節連続全体に明白に下降調が聞き取れる発音も耳にする。この場合、L は[H の直前の音節にのみ Lv を付与していると考えられる。

東京方言の句音調が上昇調の曲線声調として実現し、この上昇カーブに応じてさまざまなイントネーションを作り出していることについては母語話者である川上夔氏による詳しい記述がある。川上(1956)、川上(1961)、川上(1966)などを参照されたい。ここでは、「花」と「鼻」、「歯」と「葉」のような尾高型と平板型のアクセントの語単独での音声的实现でしばしば観察されてきた違いが、アクセント型ではなく音韻句内に核があるかないかを条件とする句音調の交替、つまり、声調曲線そのものだけでなくそれに応じたプロミネンス付与のやり方の違いとして解釈できることを述べていく。語単独の形も韻律構造論によれば音韻句だからである。

- |                         |           |        |
|-------------------------|-----------|--------|
| (25) a. ({上には}){ウエガア}ル} | RLvLvLv]F | 「上がある」 |
| b. ({上には}){ウエガイル}       | RRRRR     | 「上がいる」 |

25 は、川上氏の「並上り型句音調」、つまり、読み上げなどで現れる特に感情については無標の、音韻句の一拍目で最大の上昇が起こるタイプの句音調が、5 拍の連続にどのような曲線声調で実現するかを模式的に示したものである。音韻句内に核がある 25a では、

2 拍目以降核の下降に先立つ拍の連続全体に Lv+の曲線声調が付与されているように見える。つまり、音韻句全体のピッチの最高点の段階声調 (H)を定め、頭拍内でそこまで上昇して H を拍連続に拡散させている、という解釈も可能である。さらに、音韻句内の最初の核の下降幅が最大であることから、この核の引き起こす音節間下降 H]L 自体も句音調の実現と言えなくもない。これに対し、25b では 25a のような上昇の目標となる段階がない。最大の上昇を一拍目に置くとしても、最終拍まで上昇を続けていくことも可能である。

この違いが、平板型のウエに関係しないのは明らかであるが、語彙アル、イルとも無関係であることは、早田氏の「アクセント挿入」の規則適用が音調を変えることからわかる。早田氏は「声が高い」と表現しているが、この「高さ」の違いは曲線声調の違いに起因するものではないだろうか。有核の場合の句音調は R[H+とでもいうべき段階声調を含んでおり、プロミネンスを付与する場合にはこの目標とする H のピッチを上げるのが自然であるが、無核の句音調{R+}は、むしろ開始ピッチを下げるほうが効率的に R の上昇幅を際立たせることができる。

- |         |                      |               |
|---------|----------------------|---------------|
| (26) a. | {(上には)}{ウエガアルヨ}-FR%  | RLvLvLv]F-FR% |
| b.      | {(上には)}{ウエガイルヨ}-LvR% | RRRRR-LvR%    |
| (27) a. | {(上には)}{ウエガアルヨ}-F%   | RLvLvLv]F-F%  |
| b.      | {(上には)}{ウエガイルヨ}-F%   | RLvLvLvLv]-F% |

「並上り型句音調」は、有核音韻句であれ無核音韻句であれ句頭拍つまり左端で最大の上昇幅を実現するような曲線声調であった。これを仮に R(>)で表記する。では、上昇可能な最後の拍に最大の上昇幅を置くような曲線声調、R(<)はどのようになるだろうか。

- |         |                    |                |
|---------|--------------------|----------------|
| (28) a. | {ウエニ]ワウエガアルナ}-RLv% | RRRFRRRRF-RLv% |
| b.      | {ウエニ]ワウエガイルナ}-RLv% | RRRFRRRRR-RLv% |

アクセント句内の核に続く F 拍では上昇が阻まれるが、この部分を飛ばして次のアクセント句から改めて少しずつ上昇を続けていくことができる。「しみじみ調」あるいは究極の「遅上り型」句音調は、このような曲線声調の実現形として分析できるかもしれない。なお、28 では上昇可能な最後の拍が、文末イントネーションとして分析した RLv%の最後の成分となっている。R が音韻句内部に由来し、かつ 28a のような核による下降の後に現れ

ていることを考慮すると、このイントネーションの加わる終助詞ナの前にアクセント句の境界を置く分析も可能であると思われる。

鹿児島方言でこれに対応すると考えられる句音調は、各アクセント句の(L)[H 付加が可能な位置に最小限の上昇を置き、右端のアクセント句で最大の上昇幅にする、という形の上昇になる。右端以外のアクセント句で[Hは脱落するのではなく、上昇幅を抑制されているだけであって、音調句境界表示の機能は維持すると考える。Pierrehumbert & Beckman(1988)の表記 !H が都合がよいが、最大の[Hに先行する抑制という点でいわゆる downstep (catathesis)とはまったく逆の現象である。

- (29) a. {ウエニ]ワ|ウエ]ガ|アラ}}{イ}-F% 「上には上があるわい<sup>8)</sup>」  
           LvLv![LvFLv![LvFLv[Lv-F%            ([Lv が最高点)
- b. {ウエニ]ワ|ウエ]ガ|オ]ラ}}{イ}-F% 「上には上がいるわい」  
           LvLv![LvFLv![LvF[Lv F-F%            ([Lv が最高点)

上昇が連続的な東京方言とは異なり、鹿児島方言では上昇幅の相対比較が必要になるため、最低2個のアクセント句から成る音韻句でしかこのようなイントネーションが成立しないように見える。実際、いわゆる「しみじみ調」では鹿児島方言ではコッ]「こと」のような意味内容の乏しい形式名詞アクセント句を音韻句末に追加して[H]を置くことが多い。ただし、少なくとも筆者より下の世代では、音韻句末の音節を伸ばしてここに=RF%の形の句末イントネーションを加えてたとえばマ![ジ]メー-FRF%「まじめ!」のような形でジの[H]より大きな上昇を実現することで同等のイントネーションを実現している。

## 5. アクセント句のピッチによる弁別と境界表示

前の二章では、鹿児島方言と東京方言の韻律階層の上位の二つの構造が、それぞれ末音節でのピッチ曲線修飾・句頭からの上昇曲線という曲線声調で境界表示され、かつそれらの境界特徴がイントネーションの弁別体系を成しているらしいことを示した。もっとも下位に当たるアクセント句は、弁別アクセントが実現する単位として定義されるが、これらの境界表示にも曲線声調が関わっていることを論じていく。残る目ぼしい曲線声調は、下降曲線である。

鹿児島方言でピッチ下降がアクセント句の境界表示に関わっていることは自明である。児玉(2005)で明らかにしたように、鹿児島方言では音韻句内のアクセント句の間に必ずピ

ッチの下降が生じるからである。ここでは、鹿児島方言でのアクセントの型の弁別自体がアクセント句境界で発生するピッチ下降の下降曲線の弁別によって実現されていると分析すべきであることを中心に述べていく。

鹿児島方言の A 型アクセント句は、句末イントネーションが無標の形では末音節あるいはその内部に必ず下降調の曲線をとる。B 型ではこの下降調は現れず、ただし後続のアクセント句があれば音節間の下降が現れる。このことを児玉(2005)では先行研究に倣い、A 型では]○、B 型では○]というアクセント句末の「核」によって説明したが、むしろ A 型の最終音節については「低」ではなく「音節内下降(F)」、B 型については「高」ではなく「音節内非下降・音節間下降(nF)」とすべきである理由を挙げる。

まず、前二章でやや詳しく述べたように、句末イントネーション・句音調といった上位の境界特徴は、A 型で F、B 型で Lv または R という句末音節での曲線声調の区別をほとんど常に維持している。句末イントネーションは音節末尾の曲線を変更するが、前半部の対立は維持される。さらに、単音節アクセント句では、高低ではなく、純粹に曲線声調のみで対立が表示される。単音節アクセント句単独の発音でのこの特徴は、鹿児島方言アクセントの長い研究史の最初から平山輝男氏によって指摘されている(平山 1936) が、ここでは句音調を伴わない場合の単音節 A 型と単音節 B 型の弁別でもやはり曲線声調がかかわることを示す。"]の表記法は、児玉(2005)と同じ方式での「核」表示である。

- |                  |       |            |
|------------------|-------|------------|
| (30) a. {ハノ]エ}   | 「葉の柄」 | [LvFF      |
| b. {ハノ エ}}       | 「葉の絵」 | [LvFLv     |
| (31) a. {ハナノ]]エ} | 「花の柄」 | LvLv[LvF   |
| b. {ハナノ]]エ}}     | 「花の絵」 | LvLv[Lv]Lv |

30a-b は A 型アクセント句に後続する場合、31a-b は B 型アクセント句に後続する場合であるが、いずれも低い音韻句末音節の曲線声調は明瞭に知覚され、発音した波形のピッチ曲線でもほぼ一貫してピッチの違いが保たれる。さらに、このような 2 アクセント句連続と同じく最終音節が低い A 型アクセント句のミニマルペアを挙げる。(「絵の木」は、「絵に描かれていた木」というやや説明を要する文脈を想定している。)

- |                  |        |        |
|------------------|--------|--------|
| (32) a. {フロン]]ト} | 「風呂の戸」 | Lv[LvF |
| b. {フロン]ト}       | 「フロント」 | Lv[LvF |



- (33) a. {エノ|キ} 「絵の木」 Lv[Lv]Lv  
 b. {エノ|キ} 「榎」 Lv[LvF]

32a-b は、この音韻句構造で発音する限り（32a を二音韻句に分割しない限り）同音と聞こえるのに対し、33a-b は明らかに弁別できる。33a は、「榎」に句末イントネーション=nF% が加わったように聞こえる。A 型の核の後には F しか許容されないのに、B 型の核の後では F と Lv の対立が維持されている(33a-b)ことを、「核」による分析では説明しにくいように思われる。

促音で終わる単音節アクセント句でも、F と nF の対立は維持される。34a-b では弁別が句音調によって補強されているが、35a-b のように音韻句内部で句音調の補強がない対立でも、ゆっくり発音すれば十分に聞き分け可能な曲線声調の違いが現れる。ただし、このような音韻句内部での短いアクセント句では音節内部の曲線声調（=弁別）よりもむしろ下降によるアクセント句境界の表示（および統語構造解釈）の機能のほうが重要であるかもしれない。

- (34) a. {ナツ|チョッ|タ} 「生っていた」  $\Delta$ [Lv]LvF  
 b. { }|ナツ|チョッ|タ} 「鳴っていた」 [FLvF]  
 (35) a. {マ|タ|ナツ|チョッ|タ} 「また生っていた」 [Lv]FLv]LvF  
 b. {マ|タ| }|ナツ|チョッ|タ} 「また鳴っていた」 [Lv]FFLvF

記述的観点以外に、アクセント史的観点からも鹿児島方言の弁別対立を末音節の下降曲線声調に帰するほうが望ましい事実もある。鹿児島県北部出水方言の語複合に関する木之下(1953)は、そのアクセント表記(カナ書きの A 型末拍に左傍線で「低」、B 型末拍に右傍線で「高」)が音声表記と解釈されたことで論文本旨を離れて「上げ核」論(柴田 1955)の根拠の一つとしてアクセント研究史に影響を与えてきた論文である。また、この表記で長音節後部のいわゆる「弱い拍」のみに高低が付されていることから、鹿児島方言のようなシラビーム方言とは異なるモーラ方言と取り扱われることもある<sup>9)</sup>。しかし、この論文の表記は無声であるはずの文末促音にも傍線が付されていることから分かる通り、ある程度抽象化された音韻表記であるとみなすべきである。このような句末促音を含むミニマルペアの実現は以下のように促音に終わる音節全体の曲線声調の差となる。

- (36) a. {ナランゴッ|セ|ナ} 「鳴らないようにしなければ」 RRFLvF  
 b. {ナランゴッ||セ|ナ} 「生らないようにしなければ」 RRLv|LvF

出水方言が鹿児島方言と違うのは、母語話者である木之下氏が述べている通り A 型の次末音節に鹿児島方言のような[H]が現れないことにあるのである。鹿児島方言ではこの[H]のために A 型末音節内部の F より直前の音節(36a では[ラン])と比較しての L がより耳立つのに対し、出水方言では長音節内部の下降が明瞭に知覚される、と考えるほうがわかりやすい。また、調音面でも、句音調が先行音節連続全体としての R+となり、ピークが末音節側まで伸びやすいと言えるだろう。出水方言と鹿児島方言をともに主として音節が曲線声調を担う方言として分析すると次のようになる。

- |                 |                                |
|-----------------|--------------------------------|
| (37) a. 出水方言    | b. 鹿児島方言                       |
| A 型 : (nF+)F    | A 型 : (Lv+)F                   |
| B 型 : (nF+)Lv]  | B 型 : (Lv+)Lv]                 |
| 句音調 : [H (音韻句頭) | 句音調 : (L+)[H (最初のアクセント句の下降の直前) |

二方言の韻律実現の違いは、基本的には句音調の違いと解釈できる。これは、アクセント変化では弁別体系の変化より弁別に関わらない特徴の変化がのほうがはるかに起きやすいという上野善道氏の観察にも合致する。

鹿児島方言の体系では、音節声調が音韻句内部のアクセント句境界表示にも直接機能している。音節間下降を伴わない LvLv の連続では間に境界がなく、FF, FLv の連続では必ず境界がある。LvF の連続は、32a-b のように両義的であるが、境界があるとすれば F は単音節アクセント句に限られる。

東京方言では、拍内曲線声調によりアクセント型が弁別される一拍アクセント句のペアは存在せず、アクセント句の弁別に機能するのは曲線声調の種類に応じた拍の配列であると考えられる<sup>10)</sup>。自然下降より大きいピッチ下降曲線である F が現れるのは下げ核"]"の後に限られ、核とその前の拍の連続、及び無核アクセント句を構成する拍はすべて、音節内ピッチ下降幅が自然下降を超えない（あるいは上昇する）nF 音節から成ると考えられる。つまり、「核」は曲線声調の転換点であり、これがどの拍で起きるかで型が弁別されているわけである。

では、この曲線声調配列は、特に有核型で nF と F が混在する型で、アクセント句境界

の表示に関与しているだろうか。nF 連続+核+F 連続を有核アクセント句の音調型として同定してよいかどうかは、とりもなおさず核の後の F がアクセント句末まですべての拍に継続していると考えられるかどうかという問題である。F がもっとも明瞭なのは音韻句最初の核の直後の拍であり、この拍を含めてこれに続く部分は一律に「低」とするのが支配的な解釈であり、アクセント辞典等の記述もこれに従う。しかし、17g-h のような、文末イントネーションの交替は、全体として「低」と見られる 2 番目のアクセント句でも維持されており、「高低」ではなくイントネーション句末拍（または音節）の曲線声調に条件付けられていると見るのが妥当である。

- (38) a. {フラレタ}-LvR% 「振られた？」  
       b. {フラ]レタ}-FR% 「降られた？」
- (39) a. {キョ]ーモ|フラレタ}-LvR% 「今日も振られた？」  
       b. {キョ]ーモ|フラ]レタ}-FR% 「今日も降られた？」

少なくとも、核の後の下降／非下降の対立はイントネーション句末音節では維持されていると見るべきであろう。問題は、句内部のアクセント句境界の近傍で、たとえば 39a で「キョー」2 モーラ目の F から「タ」の Lv に至るどの段階で声調が転換しているかは実際に波形を観察してみる以外にない。そこで、複合名詞「大神宮様」の古い東京方言形がサゲを含め繰り返し現れる東京落語『富久』の古今亭志ん朝による実演の波形を観察してみた。『NHK 日本語発音アクセント辞典』で放送許容発音のダ]イジングー（グは鼻濁音表記）として記載されている形である。最初のダ]イのほか、低い位置でのグ]ーの F がどの発音でも一貫して現れる。この下降と比べると他の拍での下降は目立たない。分節音 s の後のピッチ上昇が加わって、グ]ーの F に続きサマでむしろ（おそらく分節音 s の特徴によるものと思われるが）ピッチが上昇している発音も見られた。F の 2 回の出現から、この複合名詞形は実は二語構造（の組み合わせ）として以下のように解釈すべきではないかと思われる。

- (40) {ダ]イ|ジング]ー|サマ (の|お陰で) } R]F(nF)(nF)(nF)F(nF)(nF)+

この観察をもとに、音韻句内のアクセント句境界の前後で nF から F への転換が起こるものとして、東京方言で可能なアクセント句の曲線声調について、以下のような仮説を立

てる。曲線声調の担い手は、簡単のために単に拍としておく。

(41) 東京方言

- a. 有核型 (nF)+]F+
- b. 尾高型 (nF)+]
- c. 無核型 (nF)+

アクセント句としての基本的な条件であり、通常音韻句はこの条件を崩さないように (nF)+の部分にのみ句音調(R, [H])を配分すると考える。F(nF), (nF)](nF)の連続の間には必ずアクセント句の境界があることになる。さらに、無核型のアクセント句が韻律上の(音節間曲線声調変化による)境界特徴をまったく持たないことはこの条件ですでに指定済みで、Pierrehumbert & Beckman(1988)のように(複合的な)アクセント句構成のために無核型の境界音調削除規則を設ける必要はない<sup>11)</sup>。無核型を前部要素にもつアクセント句連続は、1アクセント句としての音節配列条件を満たしている。いわば、アクセント句境界の有無による韻律的対立が中和した状態にあるように見える。このことから説明される現象もある。

- (42) a. {ニジューユ}ーロ} → {ニジュー}{[[ユ]ーロダヨ]-F%  
 b. {ニジッポ}ンド} → \*{ニジッ}{[[ポ]ンドダヨ]-F%  
 c. {ニジュ}ードル} → ?\*{ニジュ}ー}{[[ド]ルダヨ]-F%  
 d. ?{ニジュー}||ド]ル} → ??{ニジュー()}{[[ド]ルダヨ]-F%  
 e. {サンビャク}{[[ド]ルダヨ]-F%<sup>12)</sup>

42a-c の左辺はいずれも派生複合語としての1アクセント句であると考えられる。ニ]ジューの核が消去され、全体としての核が1個となりアクセント句の条件 39a を満たす。しかし、42a では恰も二語構造であるかのように二音韻句に分割され、後分のみにプロミネンスを付与することができる。これは、42a が単独では存在しない無核のニジューというアクセント句を前分にもつ二語構造と同音(同韻律)だからである<sup>13)</sup>。同じ構造の派生複合語である 42b ではニジッという分節音配列のアクセント句が東京方言では許容されず、二語構造としての解釈ができない点で 42a と異なる。一方、前分末尾に核を置く 42c の二拍後部要素]ドルに対して 42e のようなプロミネンス付与が可能だとすれば、42a のような前分核消去を伴う二語構造(サンビャク/ニジュー) ||ド]ルを仮定しなければならない。

サンビヤクとの違いは、42c では前分末尾の核がモーラ音素の前に移動している点であり、東京方言では早田(1992)が「熟合度」と呼ぶ複合語の結合度の高いものの特徴である。では、早田(1993)が示唆するようにこの「熟合度」の違いがアクセント句統合／二語構造に相当し、アクセント句統合の解釈しかできない 42c は分割不可能であるが、42d 左辺のような形が可能であれば分割できる、という可能性はないだろうか。

42c-d の左辺では、最初の核、つまり下降開始後のドのピッチについて、相対的に低い 42c のドを F、高い 42d のドを nF と解釈しているわけであるが、このような F/nF 対立を仮定すれば構造解釈が区別できるものは他にも多い。中でも問題となるのは、助詞をはじめとする付属語やその連続である。一拍の助詞の場合、東京方言に可能な一拍語の音調として nF を仮定すると、無核語に接続して全体として無核 (nF+)になる場合には、同じ形を 1 アクセント句としても二語構造としても解釈することができるのに対し、有核語に接続する場合は、1 アクセント句を構成していれば F の音調、二語構造ならば nF を維持、と二つの違う助詞形が予想される。-FR%と-LvR%の分布 (コ]ーベニ-FR%～コ]ーベニ-LvR% 「神戸に?」) から、音韻句末では少なくとも短いアクセント句ではおそらく両方が可能であることがわかる。さらに、音韻句内部においても曲線声調の異なる二つの韻律形が弁別可能であることを、一方のみで同音 (韻律) 異義が生ずる例で示す。43b も 43c と聴覚上の弁別が困難であるのは間違いないが、ピッチの言い分けは、43a,c がニの下降を抑制する (nF)のに対し 43b のニではしない(F)、というように明瞭に区分されていると考える。

- |                     |               |                       |
|---------------------|---------------|-----------------------|
| (43) a. {ツキ]ニ センエン} | RLv](nF)(nF)+ | 「月に千円」                |
| b. {ツキ]ニ センエン}      | RLv]F(nF)+    | 「月に千円」                |
| c. {ツキ]ニ センエン}      | RLv](nF)+     | 「月二千円」 <sup>14)</sup> |

このような助詞の F/nF の違いは、42d で問題にする語末モーラ音素前の核をもつ名詞では、核 (下降開始) 実現の位置と強く相関するように思われる。たとえば、センセ]ーニ「先生に」では、川上泰氏が「遅上り型」と名づけた句音調で長音節最後まで下降開始を遅らせた場合、ニの下降が不十分で、句末イントネーションとしても-FR%ではなく-LvR%が現れやすい ({センセー]ニ}-LvR% 「先生に?」)。43a に対応するような音韻句内部の実現でも、下降の開始の遅い 44a のニ(nF)、44c の nF のニ、44b の F のニの順でピッチが低くなり、44a は二語構造と解釈しやすくなる。ただし、このようなモーラ音素後の核実現は二語構造境界部に限られると考えられる。44c のような助詞を伴わないアクセント句や、

助詞にプロミネンスを付与して単独の音調句となる 44d では、モーラ音素前での核の実現が義務的であると見る。

- (44) a. {センセー}||ニ|センエン} RLVLVV](nF)(nF)+ 「先生に千円」  
 b. {センセ}ーニ|センエン} RLVLV]FF(nF)+ 「先生に千円」  
 c. {センセ}ー|ニセンエン} RLVLV]F(nF)+ 「先生二千円」  
 d. {センセ}ー}{ニ}{センエン} RLVLV]F[[LV]R+ 「先生に千円」

42d のような前分末核付与型の複合語でも、尾高型アクセント句への助詞接続とほぼ同様な音韻的環境であると考えられる。42d 右辺が容認されないとすれば、音調句境界の前で容認されないアクセント句形であるから、という説明も可能であろう。

逆に、本来二語構造であるものが分節音配列の変更で 1 アクセント句に統合して曲線声調が変わったと解釈できるケースもある。東京方言の～テオク、～テイル、～テシマウ、～テイクなどのテ形接続補助動詞で、これらは後分が無核の(nF)+配列をとる二語構造を構成する。しかし、テと動詞が融合した～トク、～テル、～チャウ、～テクでは、二語構造として分析できなくなると考えられる。有核動詞に接続するときは、いずれも-FR%の句末イントネーションを付加することができることから、この拍連続が FF の配列になっていることがわかる。1 アクセント句としての条件をみたすために動詞の核のあとのすべての音節が F となった、とも分析できる。ただし、このような 1 アクセント句化は、命令形(～トケ)、勧誘形(～チャオー)など短い語形に限られる。～トカナイト、～チャワナイトではナイト、～トカセルではおそらくカセルというように、必ずしも形態素境界に一致しない境界で分割して後分が無核(nF 形の連続)で現れる二語構造形が聞かれる。このような、意味と関連しないアクセント句の分割は、「音韻論上の語 ω」としての有核アクセント句で可能な F の連続に上限があるか、といった問題が存在していることをうかがわせる。一方、無核アクセント句は、アクセント句統合であれ二語構造であれ韻律的には同じ形となる。

助詞など短い付属語の接続は、1 アクセント句であれ二語構造であれ、プロミネンス付与ができるかどうかを除けばほとんど機能的な差はないと考えられ、これまでの東京方言の実用的なアクセント記述が曲線声調を音韻論上無意味として捨象してきたのは理解できる。一拍付属語の場合、アクセント句統合以外にも、句末イントネーション、プロミネンス付与による句音調の実現などさまざまな要因で声調が決定され、これらがすべて「イント

ネーション」と包括されてきたわけである。

しかし、無核アクセント単位の存在のために二語構造とアクセント句統合の弁別が機能しなくなっていることと、曲線声調自体が弁別可能で有意味かどうかは別の問題ではないだろうか。東京方言から姿を消しつつあるとされるナ]マ|ヤサシーやバ]カ|テ]ーネー、ア]カ|トンボといった複合語アクセントの多くが二語構造であったとしたら、低い第二の核とその近傍での曲線声調を捨象してしまうことは記述として十全とはいえない。一方で{チョー]へ]ン}や(彼氏/彼女){イナイ]レ]キ}のような新しい二語構造も複合語に加わっている。アクセント辞書に記載されるような複合語の中にも曲線声調を考慮して(二語構造として)記述すべきものがまだある可能性がある。

## 6. 音節と曲線声調

以上、さまざまな曲線声調が有限個の素性による対立をなすと仮定し、鹿児島方言と東京方言の3つの韻律構造が、これを構成する音節(拍)にどの曲線声調を指定するか、という観点からこの2方言の音韻構造について記述した。ここで、分析に用いた曲線声調を整理しておく。

まず大きく二つの素性、「長さ」と「向き」を立てる。長さは、制限があるかどうかに応じて有界/非有界に二分する。有界のものは、モーラまたは音節を上限とするもの(音節声調・Xで表記。Xは「向き」)、モーラ・音節の一部に加わるもの(音節端声調・=Y,Z=で表記)に分けられ、音節端声調は音節声調と組み合わせて新たな音節声調(X=Y>Z)を構成する。非有界の音節声調は、音節連続に対して同じ向きの音節声調を指定することができる(X+で表記)。このほかに、段階声調変化として[, ]を立てる。典型的には音節間での急激なピッチ上昇、ピッチ下降として実現し、また前後に平進の曲線を伴いやすいが、音韻論的には前後の声調の向きに直接の関与はないと考える。

向きの素性は、まず下降(F)/非下降(nF)に二分し、後者の下位範疇として上昇(R)と平進(Lv)を立てる。このようなF/nFの非対称な分析は、直接的には鹿児島方言と東京方言という「下げ核」のみをもつ言語のみを対象としたことによるが、背景には、nFはピッチ下降の抑制により実現し、その方法の違いで弁別される声調群であり、Fは単にその抑制が欠如している声調である、とする声調観がある。Lv/R/nFの区別は、段階声調素性(実現形での変異に共通する性質)としてのH, Lの実現のしかたによる。Lvは、段階声調が付与される場合、その領域が曲線全体になるのに対し、R/nFでは、その端にしか付与されず、曲線の傾斜による変異が生じる。Rは、左端にLまたは右端にHが付与されるnFである。

nF 左端の H と右端の L は、微下降を実現する。後者の例としては、鹿児島方言の句音調が L+[H]ではなく L[H]として実現し、先行の nF+に下降が聞かれる場合がある。37 の出水方言 nF に加わる句音調 H は、H が大きくなるほど高平調に近づくが、常に右端が高い微上昇を維持して微下降にはならない<sup>15)</sup>。このような向きの限定の記述には、たとえば左端と右端の両方に H が付与され、右端の H を超えない範囲で主として左端の H が可変、といったような、さらに細かい指定が必要になるケースも考えられる。記述の原則は、プロミネンス付与などで可能な変異を記述する、という点にある。

また、特に、音節連続声調 R+や F+の場合、同じ向きの曲線声調であってもその傾斜量がたとえば音節ごとに変化するような変異が存在しうる。東京方言の並上り音調と遅上り音調やしみじみ調の変異の記述として、R>と R<を用いたが、ほかにどのような弁別が可能かは、現時点ではケースバイケースで考えるしかないと思われる。また、音節声調でも段階と向きの組み合わせだけでは十分に記述できないケースがあるかもしれない。

曲線声調の有界性の区別は、かなり強力でもた直観的な曲線声調記述を可能にする。たとえば、上野善道氏の式音調「下降式」は、平進式(Lv+)と対立する音節連続への曲線声調として定義されるが、H が付与されうる Lv または R のいずれかを前の 2 拍に含み、核までの間に nF+が連続するような曲線声調と考えれば、単なる下降調(F+)とは異なる微下降が理解しやすくなるし、また、上野(1988)に例示されているさまざまな方言音調の細かい実現の違いも音節音調の差として説明されるのではないかと考える。トネーム (調素) 論の形を変えた復活と言えなくもないが、「式」や「核」と同値な構造の構成配列として有界・非有界の調素を配列すれば、記述における弁別の体系性を損なわないはずである。

以上のような曲線声調音素の鹿児島・東京両方言各韻律構造への分布をまとめると以下のようなようになる。

- (45) 曲線声調： R (上昇) F (下降) Lv (平) nF (非下降)  $\triangleleft$  (音節冒頭上昇)  
 + (音節連続曲線声調) > (左端寄り) < (右端寄り)  
 段階声調変化： [ 上昇, ] 下降 段階声調：H 高 L 低 !H 高抑制  
 |: アクセント句境界 { } : 音調句 %: イントネーション句終端 \$ 音節境界  
 $\alpha / \beta$  : 環境  $\beta$  にのみ出現する  $\alpha$

#### a. 鹿児島方言

アクセント: |(Lv+)F| (A 型) |(Lv+)Lv| (B 型) [Lv→R/\$Lv\_\$]



句音調:  $\{(L+)[H / \_ (F/)] \sim \{(\cdot)!\{H.(L+)[H / \_ (F/)]\}$   
 $L[H \rightarrow \triangle = / \_ Lv] \quad [ \text{句音調交替形?} \quad (nF+L)[H \ ]$   
 句末イントネーション:  $=nF\%, =F\%, =RF\% / (L+)\{H(F/)(+延長)\}_-$ ;  
 イントネーション音韻句:  $\{ \{RnF\% \}, \{RF\% \}, \{FnF\% \}, \{F\% \}$

b. 東京方言

アクセント:  $|nF+|F+|$  (有核型),  $|nF+|$  (尾高型),  $|nF+|$  (無核型)  
 句音調:  $nF+ \rightarrow R+ / \_ \sim R[H+ / \_ ] \quad (\{R+ : \{R>\} \sim \{R<\})$   
 句末イントネーション:  $RF\%, =R\%, =F\%, =Lv\% / \{R<\}_$   
 イントネーション音韻句:  $\{ \{RF\% \}, \{R\% \}, \{RFR\% \} \quad (\text{ネ})$

取り上げたピッチ変化を、変化の持続する単位の短い順に列挙する。両方言とも以下の4種がすべて現れてそれぞれ機能を分担している。

- (46) 音節間段階声調変化:  $[, ]$   
 音節端声調:  $=nF\%, =R\%, =F\%, =RF\%, =Lv\%, \triangle =$   
 音節声調:  $F|, Lv|, [H ([Lv]), L([Lv]), \{R, (RF\%, FR\%, FnF\%, RnF\%, RFR\%)]$   
 音節連続曲線声調:  $R+(R>,R<), Lv+, nF+, F+$

音節以下の長さの Lv 以外の曲線声調は、その多くが句末でそれ以外も音調句頭に分布している。これは、曲線声調の弁別にはある程度の持続時間が必要であり、強勢付与がほとんどなく音節が等時的に配置される日本語でもっとも長い音節が音調句末であることを反映していると思われる。このような位置以外では、曲線声調は音節連続を単位として付与されると考えられる。段階声調変化は音調句内部にも現れるが、少なくとも片側に Lv か Lv に近い音節連続曲線声調をもつことがわかる。鹿児島方言では曲線声調連続は境界表示に用いられるだけで、弁別機能は音節声調が担っている。東京方言では音節連続曲線声調 R+が句音調の弁別に用いられる。自然下降以上の下降という聴覚上の制限が加わる F+は、鹿児島方言には出現せず、東京方言では（本稿ではほとんど論じなかった）有核型の核位置の弁別機能と、有核型の後での境界表示機能を担う。

## 7. まとめと展望

児玉(2005)で、「核の前まで自然下降に逆らってピッチの高さを保つ」という特殊な定義をつけた「下げ核」の位置の違いとして鹿児島方言の二型アクセントの弁別を記述した後、早田氏の「語声調」類型の特徴として予想されるアクセント句の境界表示がぼやけてしまったことが気になって、境界表示機能を併せ持つ末音節からのピッチ下降曲線の違いによる弁別として記述をやり直そうというのが本稿の当初の目的であった。A型末音節の下降調は、長音節で下降が下降として知覚できるほか、各句末イントネーションが加わった場合、句音調を持たない場合、末音節が2モーラの場合と条件を変えても常に一定の長さで実現する不変の特徴であり、弁別特徴としてこの「長さに限界をもつ下降調」が本質的である、という確信はあった。しかし、いざ論証しようと試みて「句末イントネーション」や「句音調」と「アクセント句」の関係を統合的に述べる必要があることに気づき、そのために、鹿児島方言の韻律体系を根拠に組み立てたのが本稿の「韻律構造」論である。理論武装にあたっては、日本語諸方言の中で、弁別特徴以外のイントネーション記述やそれらを含む形での構造記述がもっとも充実している東京方言に関する主要な著作を参考にし、できれば両方言に普遍的に適用できる枠組みという方向性を考えたが、イントネーションや句音調を記述する場合、東京方言では曲線声調の弁別記述をどうするかという問題が避けて通れない。ならばいっそ全面的に曲線声調体系を基本として韻律構造を見直して見たらどうなるか、というところでこの論文の執筆に至ったわけである。

東京方言の記述は、このため、鹿児島方言からみた東京方言、という観点になっており、有核型での型の弁別、品詞ごとの活用形の型指定や複合語の型所属といった「ピッチアクセント」体系として重要であるが鹿児島方言には該当の事項がない部分には一切触れていない。いわば、「語声調」ならぬ「句声調」言語として東京方言が鹿児島方言と共通にもつと仮定される構造とその変異にのみ着目した。「韻律構造」についても、統語構造からの独立性を強調した記述に徹しているのは、ひとつには鹿児島方言の韻律構造には万能の「一般複合語規則（アクセント句統合規則）」があり、各音韻形式の統語情報をほとんど参照しない記述が可能である、という事実の反映でもある。東京方言記述に際し特に留意したのは以下の二点である。

- 1) 複合語、助動詞承接、終助詞承接などさまざまな点で観察されている境界の「結合度の違い」が二句構造（音調句境界）・二語構造（アクセント句境界）・アクセント句統合の3種類の境界の違いに還元できるか。
- 2) 平板型アクセント句は、各韻律構造の基本機能であるはずの境界表示機能を欠いた

特殊な型である。この型をもつことにより生じていると分析できる特異な言語事実はないか。

1) については、分析例を例示し、2) については鹿児島方言では見られない「アクセント句の部分へのプロミネンス付与」が東京方言では本来のアクセント句統合が平板アクセント句を先行成分とする二語構造と再解釈されるために起きるとして説明した。1)、2) とも現時点では肯定的な結論に達していると考えますが、何しろ東京方言記述は歴大な先行研究の蓄積があり、見落としもあるかもしれない。また、東京方言以外の他の方言には1) で説明できない境界現象があることも予想され、本稿で仮定した韻律構造がそのままの形で日本語各方言の韻律構造に普遍的に適用できるとは考えない。

ただし、各韻律構造の境界表示機能を特に強調したのは、鹿児島方言と近縁の関係にあると予想される、アクセント句の型の弁別をもたない九州中部諸方言にも共通に仮定される構造でなければならないと考えたからである。現時点で予想されるこれらの方言の鹿児島方言との共通点と相違点を列挙する。

- 1) イントネーション句は型の弁別を維持する必要がないので、最終音節を超えて最大で音調句全体に被さるような句末イントネーションがありうる。
- 2) プロミネンス付与や並列句構造などに動機付けられた音調句統合がアクセント句境界削除を伴って実現しやすい。
- 3) 句末イントネーションや句音調は弁別的な体系を成し、かつ境界表示機能をも実現するような曲線声調として実現する。
- 4) 下降調(F)の分布が句末イントネーションや句末音節に限定される方言が多い。

2) については児玉(2007)でも触れた。また4) は予備調査した九州南部のいくつかの方言から言えそうなことである。ただし、A型にF+をもつような二型アクセントに隣接した地域では成り立たない可能性がある。

曲線声調的ピッチ変化はつねに、ある時間的長さを持つ分節音連続の上を実現する。そのため、分節音連続の構造境界を厳密に表示する手段として非常に効率的である。ただし、何重にも重ね合わせて弁別を維持することは難しく、鹿児島方言のような三階層の境界表示と弁別の共存は、あるいは最大値であるかもしれない。しかし、これを確かめられるような研究は現状ではあまりない。声調への関心が弁別体系の解明に偏っているのは、おそらく日本に限ったことではないからである。昨年出席した『南・東南アジア諸言語における音韻論的語』と題する研究会で、ベテランのチベット語研究者 Martine Mazaudon 氏が招待講演で述べた「声調言語とはピッチによる弁別体系をもつ言語であって、境界表示機能

しかない声調は存在しない」という発言が象徴的である。翌日、John Peterson 氏によるインド・ムンダ語族カリア(Kharia)語の、下降調をほとんど欠くピッチ・データについての発表のあと、Mazaudon 氏はすぐにこの発言を撤回した。このカリア語に限らず、インドの諸言語では左端に L 付与可能な（強勢付与で句頭が下がる）上昇調の曲線声調が単語のはじめにしばしば観察される。また、日本語の終助詞に似た句末イントネーションを担う要素をもつ言語も多い。韻律構造の境界表示をピッチ変化を用いて複合的に実現している可能性が強いと考える。

鹿児島方言曲線声調の分析には、パソコン上で録音した音声のピッチ波形をすぐに分析できるプログラム *praat* に大いに助けられた。音声知覚と物理的波形にずれがあることはよく知られている。声調が高低の段階声調として分析されるのは、曲線声調がピッチ変化としては知覚されず、しばしば高低として知覚されるからであろうと考える。言語の能記は音声そのものではなく音声の知覚による弁別だからである。しかし、実際にさまざまな発音を分析してみると、曲線声調の違いが、「高低やピッチ変化ではない何か」として知覚されるケースがあることもわかる。30-31 のような低い位置での下降・非下降の対立もこれにあたる。そこで、たとえピッチ変化として知覚されなくても何らかの弁別がなされるピッチ変化パターンの違いは曲線声調の弁別として分析してみる、という方針をとった。曲線声調の知覚もまた、高低と同様に、環境に影響を受ける。たとえば、鹿児島方言 B 型句末の段階声調変化に続く音節(*nF*)は、句末音節以外は長い下降曲線で現れる。*nF/F* の対立のないこの位置での音節内下降はほとんど知覚されず、平進と分析する。しかし、この部分だけを再生してみるとはっきりと下降調が聞き取れる。つまり、同じピッチ曲線でも位置に応じて知覚が異なるわけである。さらに、このような下降調で実現する *nF* が同じ位置で *F* と対立して弁別される場合もある。30-31 に指定助動詞 $\text{ダ}$ ]を接続させるときや 35 のような句末・句中の *FnF*]と *nFnF*]の音節連続の対立である。上昇調の終助詞が接続する場合(*FR*]/*nFR*)は、低い音節の終端部の曲線が破壊されるためではないかと考えるが、弁別自体が困難になる。このような、句内部での音節声調の知覚機構については、学際的な観点から解明されなければならないと思われる。

## 注

- 1) 慣用表現にはこのような構造を語源とするものがある。タッチンコンメ「今すぐく太刀の来ぬ前に（太刀=B 型）」ハランキッシャツ「(怒りの表現) <腹のきしわく (腹=B 型)」なお、木之下(1953)の出水市方言記述には、このような音韻句統合を実現すると考えられるアクセント句統合が多数含ま

れている。児玉(2007)参考文献・注に木之下(1957)と誤記したものは木之下(1953)の誤りである。

- 2) このような言語のピッチ変動がどのようなものであるかを想像するのはやさしい。東京方言の語がすべて平板型のアクセントを持ったとしたらこれにあたるはずである。「きのうコンビニで雑誌を買ったお釣りの百円玉はここにしまったはずだ」このような言語でも、ピッチ変動以外の特徴（強勢などの韻律特徴、分節音配列の制約）をもつアクセント句階層が存在するはずだと仮定するのが韻律階層論である。
- 3) 本稿では、「1音節未満の（平進調を含む）曲線声調を担う単位」という意味で「モーラ」を用い、常にモーラに分割されない音節を軽音節、2モーラに分かれうる音節を重音節と呼ぶ。ギリシア語の段階声調を担う単位としてのモーラともまた異なる単位であるが、「韻律論上異なる振る舞いをする音節」の説明概念としてこの語を用いた。結局採用しなかったが、上野(1992)で提案された「アクセントを担う単位」としての「拍」を用いて「モーラ拍」と呼べば、韻律と無関係な音節成分分節音分類の名称としての『モーラ』と区別されたはずである。上野氏の「2拍」の「3『モーラ』音節」の中には、長軽長音節と2モーラの長重長音節が含まれる。同じ『モーラ』構成での音調の担い手の区別を「重／軽」、『モーラ』の使用を避けるため2『モーラ』音節・3『モーラ』音節を「長」「長長」で表記している。「2モーラ」を単に派生的な音節分割とする記述も可能であろうが、その場合も、基底形での音節と、実現にあたって再編された音節の2種の区別が必要になる。なお、東京方言の記述については通説通り『拍』を「モーラ」と『モーラ』の両方の意味に用いる。東京方言では句末イントネーションの一部やアクセント核のように「音節」が担う韻律特徴もあるが、句音調 R のように「モーラ」が担う場合もある。
- 4) 木部(1997)の下降調、保留、上昇調、昇降調が F%, FR%(FLv%), R%, RF%に相当する。この論文では、R%, RF%でも現れるケと現れないヤ、ナ、カが質問の文末詞の高低のアクセント型として区分されており、低アクセントの上昇調・下降調のイントネーションは FR%と F%にそれぞれ相当する。本稿では、FLv%と FR%は助詞の種類とは関係のない自由変異形と考える。
- 5) 早田(1990)では、（高い？）ネが後続する場合はアクセント挿入規則適用外、ヨは挿入後に削除規則が適用されると分析する。本稿では前者はイントネーション音調句、後者はアクセント句統合に際し核挿入が任意なものとして分析する。『NHK 日本語発音アクセント辞典』で M 類/T 類に分類される助詞はアクセント句統合を起こしてこの核の挿入を起こすものだと考えられる。なお、この辞典では形容詞接続の T 類で、平板型への核挿入を次末拍とする形で記述が統一されている。
- 6) たとえば、フタツ]キの次末音節がタツの場合と無声ツの場合ではキの最初のピッチはツのときがずっと高い。この違いは、東京方言でコシ]キ「濾し器」とコ]シキ「古式」と分析される違いに似ている。鹿児島方言句音調の[H は、音節全体が高平であることより左端が H であることがより重要と

言えるかもしれない。

- 7) B型長重末音節へのRF%の実現に際してこのようなモーラ分割がない（長軽長音節と同音である）ことが、一方ではセントーシ[イン-RF%「先頭子音?」]のようなB型末の軽音節連続と、他方ではラブ[シ(R)]イン-F%「ラブシーン?」のようなA型長重長末音節との弁別に関わっている。ただしF%が加わらないA型長重長末音節（例：ラブ[シーン-LvF%「ラブシーン。」]）は同様にモーラ分割がないため、下降曲線がよく似る。
- 8) 「アライ」「オライ」は、「アラアイ」「オラアイ」の重音節を短くした形で、単独で音韻句を構成しない場合はこの形が自然。なお、句末イントネーションを担う後続の助詞イは、通常は先行音節と音節として統合する。1音節未満の音韻句という点で、この「句末イントネーション音韻句」は韻律階層論にとって例外的であると考えねばならない。
- 9) たとえば木部(2000)。これに対する書評である上野(2003: 79)では、モーラアクセント方言でも36のような閉音節でのピッチ対立はほとんどの方言でない、とする。抽象化してモーラアクセントと解釈する可能性がないわけではないが、そのメリットはどこにあるだろうか。
- 10) 二拍アクセント句では、一拍目に無声拍を含むたとえばシ]キ（四季）／シキ]（式・四季）が音声レベルでは曲線音調による対立であるとみられるが、少なくとも「四季」にとってはこの弁別は冗長ということになるだろうか。鹿児島方言では「四季」がA型、「式」がB型で安定している。
- 11) Pierrehumbert & Beckman(1988)の日本語（東京方言）韻律記述は、やはり韻律階層論を用いた理論であるが、アクセント型の基底形としてHとLの段階声調を用いていることのほか、本稿での句音調の加わった形を無標とし、加わらないものをCatathesisや境界音調削除で派生する、という形になっている点が本稿の分析ともっとも異なる。
- 12) 42eが可能だとすれば、42aからの類推か、あるいは「ドル」の]FFを音形の似た低い位置の]nF]Fと解釈して分割している、ということになる。ここでは後者が可能と考え42dを仮定する。
- 13) 川上(1957a)で扱われている単語（アクセント句）内部へのプロミネンスのうち、「工業大学」「工業大学」も同じ説明ができる。また、カラコル]ムやサイノ]ロジーも恣意的な二語構造分割を用いたプロミネンス付与ではなかろうか。なお、ホ]ンダ[ナ・ホ]ンバ[コは、ダナ、バコに限定したプロミネンス付与ではなく、イントネーションRLv%が加わった一種の「しみじみ調」と解釈する。6,12の助詞の例と合わせ、すべて音韻句へのプロミネンス付与と分析できる。
- 14) 『NHK日本語発音アクセント辞典』はセンエンのほかに新しいアクセント形としてセ]ンエンを記載。43cの連続を含むテレビCMを43a-bと曖昧であるとした東京方言母語話者からのデータに基づく分析である。
- 15) 平山(1937)が「葦北音調」という名で図示しているものがこれに近いと考える。

## 参考文献

- 上野善道(1984)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古稀記念論文集』2(言語学篇) 東京: 明治書院. 347-390.
- 上野善道(1988)「下降式アクセントの意味するもの」『東京大学言語学論集'88』:35-73
- 上野善道(1992)「鹿児島県吹上町方言の複合名詞のアクセント」『日本語イントネーションの実態と分析』重点領域研究「日本語音声」C3 班平成3年度研究成果報告書:91-208
- 上野善道(2003)「書評:木部暢子著『西南部九州二型アクセントの研究』」『国語学』212: 74-84.
- 川上夔(1953)「「花高し」と「鼻高し」-東京アクセント段階観の限界」『音声学会会報』82: 6-9.
- 川上夔(1956)「文頭のイントネーション」『国語学』25:21-30.
- 川上夔(1957a)「東京語の卓立強調の音調」『国語研究』7:21-30.
- 川上夔(1957b)「準アクセントについて」『国語研究』7:44-60.
- 川上夔(1961)「言葉の切れ目と音調」初出『国学院雑誌』62-5:67-75. [川上夔(1995:130-142)]
- 川上夔(1963)「文末などの上昇調について」初出『国語研究』16:25-46. [川上夔(1995:274-298)]
- 川上夔(1966)「アクセント現象とアクセント概念」初出『音声学会会報』121:8-11. [川上夔(1995:23-29)]
- 川上夔(1988)「日本語の音調と音勢(原題 ことばの旋律)」初出『日本語百科大事典』. [川上夔(1995:196-206)]
- 川上夔(1995)『日本語アクセント論集』汲古書院.
- 木部暢子(1997)「鹿児島市のイントネーション」『諸方言のアクセントとイントネーション』三省堂. 249-268.
- 木部暢子(2000)『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版.
- 木之下正雄(1953)「鹿児島県出水方言におけるアクセント節について」『国語学』15:70-80.
- 郡史郎(1997a)「「当時の村山首相」の2つの意味と2つの読み:名詞句の意味構造とアクセント弱化について」『文法と音声』くろしお出版.123-146.
- 郡史郎(1997b)「日本語のイントネーション-型と機能-」『日本語音声[2] アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂.169-202.
- 児玉望(2005)「鹿児島タイプ二型アクセントの音調句」『熊本大学言語学論集4』281-307.
- 児玉望(2007)「音調句と日本語韻律構造」『熊本大学言語学論集6』1-22.

- 柴田武(1955) 「日本語のアクセント体系」『国語学』 21:44-70.
- 早田輝洋(1970)「東京アクセントのピッチ曲線」初出『文研月報』20-8. [早田(1999: 265-275)]
- 早田輝洋(1990)「東京方言の文末のアクセントとイントネーション」初出『日本語音声・研究報告』2.(原題「日本語東京方言の文末のアクセントとイントネーション」)  
[早田(1999: 335-341)]
- 早田輝洋(1992)「東京方言におけるアクセントの担い手と複合の熟合度」『日本語イントネーションの実態と分析』重点領域研究「日本語音声」C3 班平成3年度研究成果報告書: 259-264 [早田(1999: 197-207)]
- 早田輝洋(1993)「アクセントについての若干の覚書き」初出『九大言語学研究室報告』 14.  
[早田(1999: 335-341)]
- 早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』東京：大修館書店.
- 平山輝男(1936)「南九州アクセントの研究(一)」初出『方言』6-4 [井上史雄他(1999)編『九州方言考』ゆまに書房. 1.77-98.]
- 平山輝男(1937)「熊南アクセントと熊・鹿アクセント境界線」初出『コトバ』7-3、[井上史雄他(1999)編『九州方言考』ゆまに書房. 1. 113-131.]
- Hayes, Bruce and Aditi Lahiri(1991) “Bengali Intonational Phonology”. *Natural Language and Linguistic Theory* 9: 47-96.
- Nespor, Marina, and Irene Vogel (1986) *Prosodic phonology*. Dordrecht: Foris.
- Pierrehumbert, Janet & Beckman, M.E. (1988). *Japanese Tone Structure*. Linguistic Inquiry Monograph. Cambridge.
- Yip, Moira (2002). *Tone*. Cambridge: Cambridge University Press.

### オンライン音声資料

筆者の発音による鹿児島方言イントネーション資料

<http://lg.let.kumamoto-u.ac.jp/prosody/ari7.html>

三遊亭歌之介作／「酔払い」鹿児島方言古典落語のプロソディー解釈（更新）

<http://lg.let.kumamoto-u.ac.jp/prosody/yopparai.html>